



# 超普通の人々



筑駒電子書籍文庫

紫電アカツキ

## 城址公園の彼岸桜

---

四月八日、火曜日。長野県伊那市、高遠町長藤、私立まちおこし高等学校。この日、この学校の第三期生の入学式が行われた。

「新入生、呼名。一組、相生 愛」

「はい」

「安曇 呉霧」

「はい」

「東風 怜人」

「はい」

厳かな雰囲気の中、新入生の名が次々と呼ばれ、返事をし、起立する。しかし、起立した生徒は最後の人が呼ばれるまで座ることができないので、最初のほうに呼ばれた人たちは延々と立っていることとなる。

「……遠田 凜」

「はい」

「以上、百二十三名の入学を認める。新入生、着席」

幸いなことに、新入生はそこまで多くないようだ。もし五百人いたとすれば、最初に呼ばれた人の膝が笑ってしまうだろう。

「新入生が退場します、拍手でお送りください」

保護者や在校生が新入生の入学を祝う中、新入生たちはそれぞれのホームルームへと向かった。

「入学式でも紹介があった通り、一年一組の担任で生物科の沢渡 三雄、担当する部活は理科部です。大学時代の研究分野は修士で内分泌、博士で遺伝です。あと実家は養豚場をやっていて、今は僕の兄が継いでいて、確かここの食堂にも納品していたはずです。僕の自己紹介はここまでにして、右の前から順番に自己紹介してってください」

自己紹介。新入生にとっての第一関門だ。たいていの場合、座っている順番にそれをするようになる。よって、今回のように自由席の時は、それも見込んで熾烈な席取り合戦が行われる。大抵人気なのは後ろの隅で、不人気なのは前の隅だ。実際はど真ん中が一番いいポジションなのだが。

さらに問題なのは最初の何人かがふざけて妙な流れを作り出すと、その流れに乗らなければ周りから白い目で見られることだ。せっかく用意してきた台本も、これには全く意味をなさない。

「おらは安曇 呉霧言うだ。飛ぶのが得意だ。何分お頼もしやす」

「宇野 ローレンスデス。スカトランドから来まシタヨンセデス。アイライクジャパニーズ寄せ鍋デス」

「煮粗 蘇鉄です。好きな鍋は闇鍋です。よろしくお願いします」

「紀家 高志れすよ。趣味は読書れすよ。和歌山の御坊生まれれ紀州弁が抜けてないんれ、迷惑かけるけろ、よろしくお願ひしますよ。……好きな鍋はもつ鍋れすよ」

「小千谷 玲美です。一応小千谷不動産の社長の娘ということになりますが、親がすごいのであって私自身はそこまでではないと思っているので、普通に接してください。……あと、好きな鍋は桜鍋です…」

残念ながら、早速妙な空気が形成されてしまったようだ。このようなことが起きると、大抵の場合、最後の人まで好きな鍋を暴露させられることとなってしまう。

「……君たち、鍋の好みはいいから普通の自己紹介をしましょう。あと、煮粗君はこの時間が終わったら僕の準備室に来なさい。大丈夫です。痛いことはしませんから。ちょっとその銀髪の色素見るだけです」

妥当な判断である。こういう暴走を止められるか、止められないか、もしくは起こさせないか、わざと止めないか。この選択で、今後の生徒の先生に対する扱いがだいたい決まってしまう。先生側にとっても、実に痛い話である。

また、ほかの生徒同士の印象も、自己紹介で形成される場合が多い。一般的に「キャラが立っている」といわれる人は、大抵この自己紹介で普通と違うことをやらかす。例えば、安曇のように方言を丸出しにしていたり、宇野のように外国人の血が混じっていたり、煮粗のように思いっきりネタに走ったりする人たちである。

このような人々は、もしスクールカーストが形成された時には上の方が最下位に位置する場合が多い。宇野のようにその人に全く悪気はなくても、安曇のように無意識にやっていたとしても、容赦なく最下位に突っ込まれることが多々あるのである。人間、自分と違うものは分からない、危険、攻撃する！ と本能が働くからだ。

更に残念なことといえば、一度形成されたスクールカーストは、卒業時までひっくり返ることが殆どない、ということだ。だからこそ、高校生デビューとか、逆高校生デビューとか、中学校で形成されたスクールカーストと違う位置につこうとする行為が発生するのである。もっとも、そのようなカーストは発生しないのが理想的なのだが。

さて、自己紹介が終わると、今度は委員会決めである。この行事も、今後の学校生活において、多くの影響を与えることは間違いない。委員会というのは、大概一貫して三年間同じ委員会につき続ける。ゆえに、所属している委員会によってその人に蓄積されるスキルが変わるのだ。

「委員会決めですが、まずクラス議長を一人、書記を二人決めます。クラス議長は生徒会も兼任です。立候補する人はいますか？」

生徒会。それは学校と生徒とのバイパス。学校側の指示を生徒に伝え、生徒側の要望を集約して学校に伝える。その他、雑用少々。それが、生徒会の仕事である。校則を改定したりだとか、そんな大きな権限が生徒に与えられるわけがないのである。そもそも、校則というのは正式には法人規則であり、その法人に「預けられている」生徒たちがそれを改定しようなど、ありえないことだ。

そのような生徒会に、わざわざ好き好んではいる人など、まずいない。立候補するのは、生徒会のことを勘違いしている人くらいである。

「いませんか？」

勿論誰も立候補しない。

「困りましたね……。ちなみに、委員会決め終わるまで帰れませんよ？」

教室がざわつく。時間、というものを質にとられてしまっちは、誰かが立候補しなければならない。

「本当に誰もいませんか？ 僕はいつまでも待ちますよ」

「……僕がやるんよ」

「おお、紀家君がやってくれますか。じゃあ、書記をやりたい人はいますか？」

今度は割と立候補が出る。ただ聞き取って文字を書き続けられればいい書記は、比較的楽な仕事なのだ。

「それじゃあ立候補者は前に出て黒板に【永遠】と書いて下さい」

謎の指示に、どよめく生徒達。ただ単純に文字を早く、綺麗に書く事が重要な、書記という仕事にとって、この選考方法は妥当であろう。特に、【永】という文字は、永字六法と呼ばれるように美しく書くのが難しい文字だ。それと【遠】というバランスをとるのが難しい文字を書かせれば、書記にふさわしい人間を篩える。そういう意図であろう。

実際、書記が楽だから、という理由で立候補したと思われる、書くのが遅くなおかつ文字も汚い生徒もいたため、この指示には効果があったようだ。

その後も順調に各委員が決まり、配布物が配布され、この日は解散となった。

◇◇◇

四月九日、水曜日。新入生入学二日目。この週は新入生オリエンテーションのため、授業はない。そして今日は、年間スケジュールの説明と、部活の紹介が、生徒会から行われることになっている。そのため、新入生百二十三人は、講堂へと向かった。

「北側から順に一組、二組、三組の順で一番南が四組になるように座ってください。尚、各組内は自由席です」

おそらく生徒会の役員であろう、一人の男子生徒がよく通る声で叫ぶ。その声に従うかのように、新入生たちは席に着く。だがしかし、席についてもなかなか行動は静かにならない。実際二日目ともなると、早速馬の合う人同士でグループを作って、おしゃべりしている人も多い。このようなグループに入ると、途端に周りが見えなくなるので、生徒会側も大変である。

「静かにしてくださいーい！ 開始できませーん！」

更に声を荒げて言うが、聞く人は少ない。結局、この講堂に静寂が訪れるまでに、四分三十三秒かかった。

その後壇上にいた女子生徒――おそらく生徒会長だろう――は、コホンと咳払いをして、話し始めた。

「新入生の皆様、おはようございます。三年二組、生徒会長の宮田 のどかと申します。本日の主な予定は二つあります。

一つ目はこれからの学校生活の紹介、という形で大雑把な年間の学校スケジュールの説明。二つ目は部活動の紹介です。

今、二年生の役員が配布している資料が行き渡り次第、副会長の赤木から年間スケジュールの説明となります。お手数ですが、各組一番後ろの方は、資料が届きましたら挙手をお願いします」

すべての新入生に資料がいきわたったことを確認して、先ほどの整列を促していた男子生徒が、壇上に上った。

「副会長の赤木です。年間スケジュールの説明ですが、まず配布した資料の四ページを開いてください。だいたいそこに書いてある通りなんですけど、少しずつ細かい説明をします。先ず四月の入学式・オリエンテーション……今やっているこれですね。で、次の五月ですが…」

その後も延々と説明する赤木。よく息が切れないものだ。そしてそのまま三月の説明が終わるまで、実に四十分近く息継ぎらしい息継ぎもせずに話し続けた。

「では、ここで三十分の休憩とします。その間に各部活の代表者が来ることになっているので、その後は部活紹介となります。」

宮田が言い終わると同時に、再び騒がしくなる講堂。あいかわらず元気な新入生たちである。

「それでは、第二部、部活紹介です。各部活の紹介の前に、議長から本校における簡単な部活の役割を説明していただきます」

そして宮田と入れ替わるようにやや小柄な女子生徒が出てくる。

「みなさま、はじめまして。議長を務めさせていただいております三年一組の駒ヶ根 黒衣と申しますの。

さて、この学校における十の部活の役割ですが、簡単に言いますと【趣味を深く掘り下げてその趣味をもって町おこしに貢献する】ということになっておりますの。この方針は、嘗て行われた総務省の事業【異能ベーション】において、一定の効果があったことを踏まえ、それを参考としたものですの。なお、各部活には実績と十二月末に提出された活動報告書を基準に莫大な予算が降ろされますの。

また、一般的に言われる部活は、この学校では同好会に当たりますの。同好会は数が多いため、ここでの紹介はできませんので、ご了承くださいの。

みなさま第三期生が各部活に参加し、社会的な貢献ができることを切に願っておりますの」

話の途中から、生徒がどよめき始める。無理もない。部活においても【役割】を要求されているのだ。

しかし莫大な予算、という言葉聞いた途端、生徒の目が変わった。実績さえ出せば、莫大な予算が下りる――裏を返せば、実績が出せなければ予算はもらえないということになる。そのため、優秀な人材を自分の部に引き込もうと、各部活の執行部は気合が入っているのだ。

「それではまず【理科部】です。昨年度の実績は既存の遠隔作用力以外の力の発見です」

明らかに趣味の範囲を逸脱したものであるが、意外と常識にとらわれない発想を持つ未成年の方が、新たな発見をしやすい。これも【異能ベーション】で分かったことだ。そのような突拍子

もないことを、十の部活すべてがやっているのだ。特筆すべきは【魔術部】で、なんと虚数の質量を持つ物質から虚数のエネルギーを取り出し、それを制御する、というとんでもないことをやらかしていた。そもそもなんでそんな部活があるのか、というのも疑問ではあるが。

新入生にとって驚きの連続であった入学から二日目。オリエンテーションが終わり、ホームルームで連絡事項を告げる沢渡。

「それで、明日と明後日は一日中体験入部となります。各一時間ごとに一部体験できます。一日中一つの部にいても良いですし、二日かけて全ての部を見て回るのも大丈夫です。僕からは以上です。じゃあ、紀家君。あとはよろしく」

「……はい。えっと、ないと思うけど連絡事項がある人？」

いないだろう、と思うものが多数であったが、その中に一人、唐突に手をあげる者がいた。

「えっと、煮粗、用件は」

「いや、まだ僕たち、しりあって時間ないじゃん？ だから親睦を深めるためにみんなで懇談会でもやろうかな、と」

「と、いうことらしいけど、反対の人いる？」

誰も挙手しない。つまり、煮粗の案は積極的に受け入れられた、ということだ。

「じゃあ、いつやるか、案のある人、いる？ ……じゃあ、東風」

「やのあさってがいいと思う。」

「その日、ね」

いつの間にか黒板に移動した書記の相生が、即座に黒板に書く。

「じゃあ、その日に都合のつかない人はいる？」

「おら、今度の土日は都合が悪いだ。申し訳ねえ」

「他の日であいてる日はある？」

「まだわからねえだ。おらはいかなでええから、みなで楽しまない」

「わかった。他に都合の悪い人ある？」

誰も挙手しない。つまり、これは安曇以外の全員、やのあさって……四月十二日、土曜日で都合が合う、ということである。まだ本格的に部活の始まっていない四月の初めでなければ、このようなことはなかつたらう。

「じゃあ、その日、ろこで何する？」

「城址公園で花見以外ねーだろ」

いきなり響く男子生徒の声。正論である。高遠城址公園の高遠小彼岸桜は、ここにしか自生しない珍しい桜で、花の色が濃く、更に標高の高い盆地であるこの地域の冬の寒さと相成って、天下第一の桜ともいわれるほど美しいのである。

「まあ、それ以外選択肢ないよね～」

「ジャパニーズ・ハナミ・パーティ！ ワタシ一番してみたかた事デス！」

「花見かあ」

こうして一年一組の懇談会……花見が決まったのである。

◇◇◇

四月十一日、金曜日。この日は雪が降っていた。

「四月に入ったのに雪なんて。明日の花見は大丈夫かしら」

「まあ、既に桜は六分咲きらしいし、雪桜、というのも味があっていいんじゃないかな」

「でもほんと突然だよなー。上雪でもなさそうだし。美和湖では水が凍りすぎて湖の表面が割れてるらしいわよ」

「えっと、あしたは来るだろうかと各自判断して、十時三十分に城址公園の南門集合、というこ  
とれ」

放課後になってもやまない雪に、クラスの雰囲気も重かった。とりわけ日本に来たばかりの  
宇野なんかは、そのきれいなスカーレットの髪が緋色のように見えるほどだ。

「宇野、大丈夫？」

「蘇鉄サン、ハナミで天気悪かたら行かれぬデスカ？」

「いや、雪桜、ってのも趣があっていいとは思うけど」

「デモ満開のサクランボ＝ブロッサムを見たかたデス」

「まあ、僕も見たいけどね」

あと、チェリーブロッサム全体で桜、と訳すんだよ、と言いつつ煮粗は窓の方に顔を向けた。

「でも、おかしいと思わない？ 宇野」

「ホワッ？」

「突然、守屋の山の真上に、とても冷たい空気が現れる、なんてあり得ると思う？」

「フィジカルにありえないデス。ワタシはグダットフィジックスなのでエイボトウソー」

「だよねえ……」

静かな一組の教室。それに比べこのような事情のない他の組の生徒たちは、楽しそうにおしゃ  
べりしながら廊下を歩いている。

「あ、凜。魔術部の実演、どうだった～？」

「うん、面白かったよ。私の手の上で突然水道水が凍るとか、あれすっごく楽しかった」

「ホントに～？ 私も魔術部に入部しようかな～」

彼女たちはただおしゃべりしていただけたのだろう。しかしこのおしゃべりを聞いた煮粗と宇  
野は目を見合わせた。

「聞いた、あれ」

「聞きマシタ。もしかシテ」

「かもね。おそらく、守屋の山の上で、魔術のようなものを使った人がいる」

◇◇◇

学校の門の目と鼻の先にある荒町のバス停から、煮粗と宇野は十五時二十七分発の古屋敷行の

バスに乗った。

この学校が開校するとき、このバス路線は増便される計画があったが、校長の「町おこしのためには不便を知らんといかん」という一言により、その計画はなくなった。そのため、下校時は一日に七往復しかない藤沢・茅野線のバスに乗っている生徒が殆どである。

そのような訳で、このバスも高遠駅方面のバスに比べればましたが、それなりに混雑していた。しかもその後、小田井口停留所から先は自由乗降である。そのため、このバスは慢性的に遅延が発生するのだ。

煮粗や宇野としては、真夜中に雪山に上るのは御免である。だから歩くよりは絶対に速いバスに乗ったのだ。しかし結局、このバスは定刻から十五分も遅れた、十六時丁度に古屋敷停留所に到着した。

古屋敷停留所から先は、春の行楽シーズンの臨時快速便四往復しかバスがない。しかし、バスの時刻が合わなかったので、煮粗と宇野は守屋登山口停留所までも歩き、そこから登山する羽目になってしまった。

「宇野、山登りは得意？」

「スカトランドの山は沢山上りまシタ」

古屋敷停留所から守屋山山頂までの所要時間は、二時間。守屋登山口からの高遠駅行き臨時バスの最終便は、十八時五分発。地元に住んでいた煮粗の場合は普通の人三倍速で登山できるが、最近スコットランドから来た宇野はそうではない。宇野も登山経験は豊富なようなので、急いで二・五倍速、といったところだろう。

「急ぐよ。最終のバスがなくなる」

「ワタシはステインガローンなので大丈夫デスガ」

「そういう問題じゃなくて、明日体壊したら意味ないじゃん」

「急ぎマス」

普通の人々がゆっくり、慎重に登る登山道を、二人の少年は駆け登る。

登れば登るほど下がっていく気温。さすがに雪の降る中、それも夕方になってから登ろう、と考えている人は他にはいないようで、前を登っている人を抜かず、という登山における最大のタブーは侵さずに済んだ。

「ココは山頂デスカ？」

「いや、まだニセピークだよ。ここまでくればあとちょっとだけだ」

東峰にある守屋神社の分社を無視して、縛れる寒さを振りほどき、西峰まで走る。それほど急いでいたのだ。

そして十六時五十分、煮粗と宇野は長野県伊那市、高遠町藤澤の守屋山西峰に到着した。しかし、そこには誰もいなかった。

「空振り、だったのか」

「いや、空振りにあらず」

「！ フウッ！？」

突如聞こえた声に振り返る。そこにいたのは、白と水色の氏子姿に身を包んだ……



「安曇！　なんでこんなところに」

「我は呉霧であり呉霧にあらず。呉霧は我の依世なり」

「ナラバ、あなたは誰デスカ？」

「安曇から出ていけ！」

すると安曇に憑いた何かは、咳払いをして、煮粗に向き直った。

「そはせられず。呉霧は一年神主なり。されど、少子化進み、九年もの間物したる結果、我と呉霧はかれられなくなりなき」

一年神主。それは毎年数えで八つになった男子を神主とし神をその男子に降ろす。そして次の神主が決まり次第、前の神主を人身御供として神に捧げる、という中南信では広く知られた伝説である。それをいまだにやっていた集落があるとは、驚きである。

「それで、あなたはいったい誰？　なぜこのようなことを？」

「我は、塞ノ神、御石神なり！　などこれをしたかといはば、高遠なる城の桜の下に埋まりたる士の亡者が、年ごとによみがえらむとしたれば、塞の神の力を以てこれを防ぐなり」

「それは寒波を出した理由にはならないんじゃ」

「我は寒き時に最も強き力を出すなり。ゆえに寒くするなり」

「でも、去年も一昨年も、ここまで寒くはなかったよ！」

「呉霧、我に儀式をとく終はらすよう頼みき。新しき友との宴にゆかし、と」

「安曇サン……」

さすがに自分以外全員が参加する花見には行きたかったのだろう。それで御石神に頼んだ。

また昨日出席を取っていなかったことから、安曇は今日も出席を取らないことがわかっていたのだろう。だからこそ今日、この儀式を行ったのだ。

「だったらそれこそなぜ毎年毎年周りくどいやりかたをするのさ！　出てきた亡者を祓えば一発じゃないか」

「高遠なる城にある亡者、よみがえりてはいとど遅し。常人をまきこみたからざるゆゑ、未だ然らぬうちに止めたし。我が神域のこの山の頂にあらば、物せらるるなり」

「しかし！」

「コームダン、蘇鉄サン。ミシャクジサン、何時、儀式は終わるのデスカ？」

「憂はずとも、明日の辰の刻には終はらん」

「蘇鉄サン、エニズ辰の刻？」

「午前八時。登山口九時三十六分のバスに乗れば、集合時間の十時半には間に合うと思うけど...  
...桜は咲かないだろうね。温度差が重要とはいえ、半日はかかるよ」

「桜.....咲かナイ.....」

突如暗くなる雰囲気。虚ろになる宇野の目。そして宇野は、鞆から徐ろにげんのうを取り出し、御石神に向かって投げた。

それを必要最低限の動きで避ける御石神。

「宇野！　そんなことしたら」

「笑止。我に齒向かわんとするか」

「ワタシは満開の桜が見たいのデス」

「汝は人の物語を聞きたらずや」

「被害を出サズニ、亡者を祓エバ、ノプロローレン」

たしかに、宇野の言っていることは正しい。だが、それができないと御石神が踏んでいるからこそ、わざわざこのような周りくどいやり方をしているのである。

「そもそも、その土のいる桜はドノ桜デスカ」

「宇野、きみこそ落ち着け。まあ、寒い日に夜桜を見に来る物好きな人はあんまりいないだろうけどね。だからといって、げんのうを投げるのはダメだと思うよ。今回は当たらなかったからまだいいとして、もし当たったりしたら」

その時である。御石神の後ろから、突然なにかが飛んできて、その柄のようなものが御石神の左の足のすねに当たったのは。

「金槌……汝の投げしものか」

「イエス」

すると、少しではあるが寒気が引いた。

「をかし。汝の策をし候わん。高遠なる城に行かん」

御石神は笑いながらげんのうを拾うと、宇野に手渡した。宇野はそれを受け取り、鞆にしまう。

そして彼らは雪に覆われた登山道を駆け下りた。

長野県伊那市、守屋登山口バス停。

「間に合った、かな？」

腕時計と時刻表を見る煮粗。現在時刻は十八時二分。最終のバスは十八時五分発だ。

「危なかったあ。間に合ったみたい」

「間に合はざりきとしても、飛べばよからずや」

「二十キロくらいあるけどね……」

カップラーメンができるほど待つと、北からバスがやってきた。

「高遠駅行き、快速です」

ステレオボイスな運転手の声を聞きつつ、彼らはバスに乗車した。

「それで、その桜って、どんな特徴があるの？」

「花卉のいと美しうあなる桜なり」

「それ、咲いてないのにわかるの？」

「……………」

「ねえ、なんか言ってよ」

「花咲かずとも、ありがたきほどいぶせしき気配にすずろなりとも察すなり」

「……最初からそう言ってくればいいのに」

「さもありません。……さるほどに、汝はいかにして土を祓わんとするか」

「あ」

煮粗にとって、盲点であった。そもそも彼は、なぜ寒気が無理や山の上に現れたのか気になってきただけであり、戦いなど微塵も想定していなかった。普通に考えれば、鞆にげんのうが入っていた宇野のほうがおかしいのである。

しかし御石神は、彼らが自分と戦いに来たと思っているのだろう。

「まあ、それは駅についてからでいっか」

「いいんデスカ……」

◇◇◇

十八時二十分。まちおこし高校特別棟。

「部長殿！ 魔術反応になにか引っかかりましたぞ！」

「ふーん。で、どこ？」

「只今杖突街道を秒速約十五メートルで南下中ですな」

「え？ 学校の外？ ちょっと探知機見せなさいよ」

「わかりました。……しかし、見たこともない魔術回路ですな。ありえない」

「……これは調査が必要ね。福岡、スコープ持ってきて。あと、オスミウムペンも」

「バスに追いつけるんですかな」

「つべこべ言わない、飛んで行くわよ！」

◇◇◇

「ご乗車、ありがとうございました。高遠駅、終点です。何方様も、お忘れ物なさいませんよう、ご注意ください」

十八時三十八分、長野県伊那市、高遠町西高遠、高遠駅。

通勤客や観光客に紛れて、三人の少年――実際には二人と一柱だが――が降り立つ。

その高遠駅から南東に約八百メートル、高遠城址公園。彼らは、そこに十八時四十五分に到着した。

「蘇鉄サン、ハドゥユおっ祓い？」

「……あ。宇野、【戦うための】何か、持ってない？」

「ココに【クロウバル】が有りマス。」

鞆の中を見て答える宇野。なぜ、そのようなものを持っているのは定かではない。もしかしたら、宇野の鞆の中は工具箱にでもなっているのではないだろうか。

「あのね、工具は【戦うための】ものではない。いいね？」

「アッハイ。デモ、幅が十九ミリメートルあるので、刺さると痛いデス。」

「長さは？」

「二百三十九ミリ」

末尾の九という数字が、恣意的なものと感じられてしまうのは、よくあることである。それは

、末尾が九の数字に一を足すと、末尾が零になるからに他ならない。実際、この数字は恣意的に規制を免れようとしているのだが。

「……もういいや。無いよりはマシだし、そのカジヤ、借りるよ」

十八時五十八分。長野県伊那市、高遠町東高遠。高遠城址公園。

「着きたり。そが【花卉のいと美しうあなる桜】なめり」

「これが……」

美しすぎる桜。未だに五分咲きでありながら、その鮮やかなマゼンタ。一度目に入れてしまえば、足が棒になるまで目が離せなくなる。もしこれが満開になったら、死ぬほど美しい、といった表現が最も似合うだろう。死ぬまで目が離せない、恐ろしい美。その素質を、この桜は持っている。

「隙ありッ！」

「……！ アンブシュ！」

突如三人の後ろからくる斬撃。宇野はいち早く察してげんのうで軌道をそらす。それと刀との衝突する金属音が、襲撃を告げる。

「ほう。今のを防ぐか。厄介な取り巻きは排除するに限るのだが、貴様はただの取り巻きではないようだな。だが、私の用があるのは、御石神、お前だ」

「汝がさる亡者なるか」

「そうだ。お前が塞をしなければ、私の計画はすぐに進んだものを。……高遠藩士内藤、いざ参る！」

そう言うと内藤は居合の構えを取る。

「我には汝の案は知らず。されど、死人が現世に戻る由もなし。ゆゑに、汝を……成仏せさす！」

「ほう、お前の勝利条件はそれか。だが、俺はは御石神、お前を殺さなくてもいいんだ。彼岸の門さえ開ければ」

「汝に案あれども、すべき事は変わらじ」

「それはこっちも同じだ！」

なるべく空気の抵抗を受けないように、一直線に、振り降ろされる刀。最低限の動きで躲す御石神。

「汝はなど成仏せん」

「お前は知っているだろう。明治四年の悲しみを。この美しかった高遠の城から、城は取り壊され、すべての木が競売にかけられ、何もなただの荒野になったことを」

右に振り下ろされる刀。

「俺は、かつての美しい城の姿を、散っていった同志に見せるまで、成仏などしない！」

左に振り下ろされる刀。

「そのためにも、彼岸の門を開かなければならない！」

「わからずや。……宇野、煮粗。ここに近づかんとするものを押しやらせよ」

そして御石神は、足元の雪に手をふれると、それを元にして氷の刀を創りだした。  
「亡者、内藤よ！ 我が域にて彼岸の門を開かんとしたるを、後より憂うべかれ！」

◇◇◇

「部長殿、反応が相当近いですぞ。この方角と距離からして、高遠閣ですかな」  
「高遠閣？ にしては強すぎるわね。一体どういう回路でこうなってるんだか」  
「我は存じ上げませんぞ。……にしても、寒じますな。凍える世界はありえない」  
「ええ、まるで守屋山の上にあった寒気が、一気にここに降りてきたかのような……！ まさか！」

あの寒気も、魔術だったっていの？ と、彼女——魔術部部長、小町屋 美智子——は呟いた。

◇◇◇

十九時三十分。御石神と内藤が戦いだして、三十分経過した。はじめは拮抗状態だった戦いも、十五分を過ぎるとやや御石神が押しはじめ、今となっては内藤は虫の息となっていた。

「まだだ、彼岸の門を開くまで、俺は成仏できん！」

「笑止千万なり。已に血肉もなき汝が、彼岸の門を開くやは」

「……ならば、お前の血を使うまで。……いや」

御石神から目をそらす内藤。

「御石神の取り巻き、あいつらのほうがやりやすそうだな！」

「……なっ」

そして内藤は、近づこうとするものがないかと、内藤から目を離している煮粗に斬りかかる！ それに気づき、斬撃をカジヤで受け止める煮粗。

「アンブシュ・アゲイン！ 卑怯案件！」

やや押され気味だった煮粗を助けまいと、げんのうで刀を弾き飛ばす宇野。

「三対一で戦ってるお前らが卑怯を語るか！」

「違いマス！ アナタは私の三倍より強いデス！」

屁理屈をこねる宇野。その間に、内藤のすねをカジヤで引っ掛ける煮粗。すかさず御石神が内藤に対して異様なほどの冷気を放つ。すると溶けかけていた内藤の足元の雪が凍り、内藤は突然低くなった静止摩擦力に対応できず転んでしまった。

「いかなるよしがありても、彼岸の門を開かず訳にはいかぬ」

「黙れ！ 俺の悲しみが、お前に理解できるか！」

「汝のそは、多き人におやじ悲しびをせめて押し入るなるとわからずや！」

そう言って御石神は桜の木を殴ると、内藤の頭の上に雪の塊が落ちる。そこに御石神が強烈な冷気を放出した。

内藤は、凍ってしまって動けない。

「念には念を入れよ、といふ。なほこうざすべきにあらん」

そう言うと、同じ桜の木を蹴る。

内藤は、凍ってしまって動けない！

その真上から、先ほどのそれよりも多くの雪が内藤の上へと落ちた。

「ミシャクジサン、実際コワイヤダー」

「褻に合はさばいと奥ゆかし」

「……蘇鉄サン、ワダズ奥ゆかしミーン？」

「洗練された、とかそういう意味。色んな意味があるからめんどくさいけど、今のは控えめ、ってことだと思うよ」

「……これでデスカ？ 内藤サン見えマセンヨ？」

「たぶん、これで」

控えめというには程遠いと思われるが、御石神自身が奥ゆかしといているので、これでも控えめなのだろう。彼基準で。

もっとも、その御石神は今、桜に積もっていた雪が全部落ちたのを確認して、内藤の入った雪球を他の桜の下に転がしているが。

……ずいぶん地味な方法を取る神様である。

「まづ、いとまいらするはこでよしとす」

「これで時間稼ぎなの……」

御石神のカミングアウトに、かなり引く二人。そんな二人を気にもかけず、御石神は雪球を作り出し、左斜め後ろに投げる。

「然れば、その桜なる木の上にある者共、とく降りよ。たく見られたるに、わからざるやは。見るに、をとこをとめひとりごとによあらん」

「……部長殿、ばれてますぞ」

「いや、まだただのカマかけの可能性も」

「部長殿はもっとロジックすべきですな……うおっと」

二人の間を飛び抜けるげんのう。

「威嚇ですか？ 負担がかかりますから、降りたほうが身のためですぞ」

「好きにきなさい」

「我は先に降りますぞ」

先に男のほうが危険を察知して木から飛び降りる。その直後、旋回したげんのうがもう一人の乗っていた木の枝に当たる。その衝撃で木が大きく揺れて、彼女は足を滑らせて雪の上に落ちてしまった。

「上手に落とせまシタ」

「……宇野、さっきもいったけど、それ直接当たったら骨折するからね？」

「わざと外してマス」

自信たっぷりの目で、煮粗を見る宇野。そのためだろうか、煮粗は言い返すことができな

った。

「それで、落ちた人は大丈夫なの？」

「大丈夫だと思いますぞ。部長殿は、爆発に巻き込まれても髪型が変わるだけですからな」

「……あなたは？」

「おっと、これは失礼いたしましたな。我は、まちおこし高校の魔術部の副部長で、福島 優万旗といいますぞ」

きれいなお辞儀をする福島。覗き見していたことを除けば、かなり紳士的な人のようだ。

「先輩だったんデスカ」

「……ということは、貴殿は新入生、ということですかな」

「はい、ふたりとも。僕は煮粗 蘇鉄で、こっちが宇野 ローレンス。……それで、雪にダイブしたのは、部長さんってことだから、小町屋先輩？」

「あってますな」

「など垣間見んとするや」

「我は反対したんですがな。部長殿、雪を食べても美味しくありませんぞ」

そう言うとき福島は懐からカードのようなものを取り出し、小町屋に向かって投げた。そして、それが小町家に当たった途端、カードが爆ぜた。

「……若しかシテ、投げたのあたっテモノプロローレン？」

「部長殿はげんのう程度なら確定で五発は耐えますぞ」

「どういう体の構造してるんだらう……」

「……福島、あることないこと吹きこまない！」

爆発で出来た煙の中から、鬼のようなシルエットが浮かび上がる。

「部長殿、その髪型は物理的にありえない」

「そうさせたのはあんたでしょうが！」

煙が晴れる。そこには後ろに落ろした髪が何故か重力に逆らい、角のようになった少女がいた。確かに物理的にあり得ない髪型である。

「総合的にロジックしますと、こそこそ覗き見しようとする貴殿に大きく責任がありますな」

「だからといって木から落ちて気絶してるところに爆発打ち込むことないじゃない！」

「それは気絶した貴殿が悪いですな。我は早く降りたほうがいと忠告しましたぞ。……この話はここで終わりにすべきですな。いい加減御石神殿の目が怖いんですぞ」

視線で人を殺す、というほどではないが、余程の人でない限り、怯えて動きが鈍くなりそうなほど怖い顔をした御石神が、仁王立ちしていた。

「汝はなど垣間見んとせかるや」

「……知らない魔術反応があったから気になって来ただけよ」

「堂々と見てればよかったと思いますぞ」

「あんたは黙ってなさい。……まあ、複写は出来ても解析に至るまで時間がかかりそうだけど。」

「……魔術、といふのは心得ざるなり」

「いや、あなた今使ってたでしょう」

「部長殿はもっとロジックすべきですな。この現象に魔術、と部長殿が名づけたのはまだ一年と半年前ですぞ。名前を知らないだけというのもありえ一る。というかそれ以外ありえない」

「……用はそのみや。我垣間見らるるをこのまざれば、見まほしからば宗宗しく見よ。其れに取りて、ゆめゆめ塞くことなかれ」

「ありがとうございます！」

お礼を言い、メモ帳とペンを取り出し、メガネのようなものをかける小町屋。さっきの爆発で、よく壊れなかったものだ。

その目線の先では、御石神が木の枝で雪に何かを描いていた。福島曰く、魔法陣を描く手順に似ているが、直径一メートルなんて、大きさがありえない、とのことだ。

その後カップうどんができるくらい待つと、御石神は枝を捨て、魔法陣の縁を触る。すると、御石神の触れているところから、薄く黄色のかかった銀色の何かが流れだす。三十秒も立たないうちに、御石神が雪に木の枝で作った溝に、その銀色のものが行き渡った。

「鉄の匂いが実際凄いデス」

「鉄を触媒にするのですか。初耳ですな。我はロジウムを使ってますぞ。部長殿はオスミウムですな」

「ロジウム？ ルセニウムじゃないんデスカ？」

「……なんでルテニウムが使えることを知ってるんですかな？」

「鉄、ルセニウム、オスミウム、ハッシウムの四つでワングループデス」

「今は御石神様の魔術を見たいですから、後でその話、聞かせていただけませんか？」

「別に大丈夫デス」

福島と宇野が専門的な話をしている横で、御石神が描いた魔法陣を手帳に書き写す小町家。何もやることのない煮粗はあたりを見回して翌日の花見にちょうどいい場所を探している。そしてその奥で、内藤の入った雪球を、力いっぱい先ほど形成した魔法陣の上へと背中で押して転がしている御石神。つらそうである。もう少し控えめにしておけばよかったものだ。

そして御石神が雪球を魔法陣の中心まで転がすと、御石神は魔法陣の外に出る。その後魔法陣の外周を形成している鉄の外側の雪を掘って、御石神が魔法陣に触れと、明順応が追いつかないほど激しい紫と緑の光が魔法陣から発せられる！

「アイー！ ワッ、ワッハプッ」

「落ち着けですぞ。魔術の火力が高いだけですぞ」

明順応が終わる頃には、已に光はなく、今度は改めて暗順応が始まる。暗順応が終わるまで、人間の目は何も見ることができないので、魔法陣のなかで何があったかは定かではない。ただ、魔法陣の中心には、光る前と変わらず雪球が佇んでいた。

「ってこれ、何も変わってないじゃん！」

いち早く暗順応を終えた煮粗が叫ぶ。それに御石神は冷静に

「仔細なし。割りてみれば心得べし」

と返す。それを受けて煮粗は頭の上に疑問符を浮かべつつ、カジヤを振り上げ、雪球に振り下



ろす。しかし、雪球は砕けない。硬すぎである。

「煮粗殿、手伝いますぞ」

カードのようなものを雪球に投げる福島。そのカードが雪球に刺さり、爆発する。しかし、雪球はその爆発をゼロ距離で受けていたはずなのに、カードが刺さった時の亀裂から真っ二つに割れただけだった。

ただ、それでも中を確認する、という目的は達成できる。そこで、確認したところ、雪球の中には人型の穴が開いていた。つまり、魔法陣が発光した際に、問題なく処理された、ということになる。

「仔細なしと言いき。功あなるべし」

そう言うと冷気を放出するのをやめる御石神。口ではこういつているが、どうやら警戒はしていたようだった。

「我は疲れたり。後は呉霧に任す」

すると御石神は徐ろに目をつむる。そして目を開けると、黄色かった目は黒色になっていた。

◇◇◇

十九時五十二分、高遠駅。

「……だとシマスト、PGEとIGEじゃないデスカ？」

「だとすると、コバルト、ニッケル、パラジウム、イリジウムは要検証ですな」

高遠駅発の最終バスも出払い、高遠駅行きの最終バスからの客を拾おうと、数台タクシーが止まっている。

「我は四日市場ですな」

「ワタシは笠原の方デス」

「僕は藤澤だけど」

「私も藤澤ね」

「おらほは長藤だ」

「ワタシだけ逆デスカ……。ソテツサン、クレムサン、また明日デス」

「また明日～」

ややしょんぼりとしながら、伊那北駅の方へ歩き出す宇野。煮粗や安曇はまた明日、と声をかけると、四人でタクシーに乗った。

「どちらまで行かれますか？」

「藤澤までお願いします。あと、四日市場と長藤で一人ずつ降りるので」

「わかりました。じゃあ一人あたり千五百円ですね」

タクシーが走りだす。三人はとりあえず、藤澤まで行く小町屋にお金を渡した。

◇◇◇

四月十一日、土曜日、十時二十五分。高遠城址公園、南門。ぼんやりとした半透明のシートが掛けられたような空から、うららかな日差しが差し込んでいる。絶好のお花見日和である。

昨日の雪のせいか、観光客もほとんどいない。しかしながら、未だ溶けていない前日の雪の白と、強烈な寒気――御石神が昨晚公園内で放ち続けたもの――から開放されて一晩で満開になった小彼岸桜のマゼンタとのアクセントが、幻想的な美しさを醸し出している。

「……あ、東風来たね。これで二十九人。まだ時間じゃないけど、全員いるみたいだし、移動するよー！」

煮粗の大きな声が響く。そして一同は、高遠閣の方へ移動し、昨晚煮粗が見回った場所に到着し、ブルーシートを敷く。花見の始まりだ。

それぞれが思い思いの時間を過ごす中、相生が何かを見つけた。

「うわ、大きな雪球がある。すご〜い」

雪球。丁度人一人が入りそうな大きさ。

「これ、もしかシテ……」

宇野が何かを思い出したように、タータン柄のキルトからげんのうを取り出して近寄り、少しずつ叩く。

コンコンコンコン……

「宇野君、げんのうなんかでたたいてどうするの？」

「音を聞いていマス。静寂にしてクダサイ」

コンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンカン

「ザイリー！ ハッ」

そして宇野は違う音がした場所に向かって、げんのうで最大限の力を以って叩く！

するとなんともないように見えた雪球が、突然震えだして、しばらくすると爆発四散！

「……やっぱりアナタでしたか、クレムサン」

雪球があった場所から目を回した安曇が出てくる。

「……なにするだ、揺れるちゅうでの。誰かよばってきて」

「シャ。タカシサン！ ちょっとこっち来てクダサイ」

偶然近くで団子を食べていた紀家を呼ぶ宇野。

「ろうした。って、安曇、お前来れないんだなかったのか」

「都合が悪うのうなってきたんだ。脅かそうと思ったけども、さきにうたれた。ちょっと血い死んで病んどるし」

「確かににえてるな。とりあえず、あっこまで連れてくか。そこれ横になってろ。雪残ってて寒ぢるける。……宇野、足持って。相生はここ、ちょっとよろしく」

そう言って安曇を三人で運ぶ。ブルーシートのところまで連れて行くと、クラスメートの安曇が来ていたことへの驚きと歓迎の聲が聞こえるが、当の安曇はそれどころではない。

「安曇ー！ ざざむし食べるか？」

「今はいいだ。十分位まっとくれだ」

その言葉通り、十分も経つと安曇は元気になり、他のクラスメートの輪の中にとけ込むことが

できたようだった。

◇◇◇

十二時丁度。高遠城址公園。

桜まつりの屋台も書き入れ時で、人が絶えることはない。

当然、一年一組の生徒にも、お弁当を忘れたり、足りなかったりした生徒も利用している。

「桜そば一つ下さい」

「はいよ、六百元です。……千百円のお預かり、お釣り五百円です」

煮粗もお弁当を持ってきたが、他の人に取られたりした結果、足りなくなってしまう、桜そば——いわゆる馬肉入りの蕎麦——を食べに来たのだ。

「ソテツサン、ここにいたんデスカ」

「あ、宇野。どうしたの」

「ファゲツベントー。……この右から五番目の【兎南蛮蕎麦】を一つ下さい。」

「六百八十円です。……七百円から、お釣り二十円です」

「数ある蕎麦の中からはなんでそれを」

「カンジ=チャラクタがいっぱいあるから」

漢字は外人に実際人気である。文字自体が意味を持つ、というのがどうやら外国人の心をくすぐるらしいのだ。それだけで商品を選択する外人も多い。

「……まあ、理由なんて人それぞれだし、いっか」

「ハイお待ち。こっちが桜そばで、こっちが兎南蛮。ごゆっくりどうぞ〜」

「ありいがとうございマス。……頂きマス」

蕎麦をすすり始める宇野。

「スカトランドのご飯も美味しかったデスガ、日本はモアデス」

ここ伊那谷は信州蕎麦の発祥地とも言われており、美味しくないとはいわれない。

「日本に来てよかったデス」

「……大げさだねえ。まあ、蕎麦美味しいから仕方ないかもしれないけど。……ところで、宇野は部活どこにするか決めた？ 僕はまだ決めてないけど」

「魔術部行こうと思てマス。ヤンタサンと気が合いまシタ。魔術のヴァーチャルな所を突き詰めたいデス」

「ヴァーチャルねえ……。魔術ってそんな感じだよな」

「確かに、あのロジコーなところとかいいデス」

「……ん？」

「ワッザ？」

「ヴァーチャルって、仮想的なだよな」

「……日本語では、実質的なだった気がしマス。……確かじゃないから英語でシタ」

二人の間に走る沈黙。単語には幾つもの意味があり、取り違えると喧嘩になりかねない。

「……おそば食べマシヨウ」

「伸びちゃうし、食べよう」

ズッ、ズッ。気まずい雰囲気の中、蕎麦を嚼む音だけが響く。

「うう。グスン」

訂正しよう。何故か宇野が泣いていた。

「……どうしたの？」

「ラビッ、ラビッ、ラビッパイ。カマイレディズ、カマンバイ。エルシュアベイビーゼキルクライ」

突然歌い出す宇野。事情がよくわからないので、変な人に見える。

「……えっと？」

「……グラマー。ウウ……」

再び泣き出す宇野。情緒不安定なのだろうか。

「ブリテンではラビッパイはみんな好きデス。イリズセイム味、ソー」

「……そりゃ両方共兎だからねえ」

「あ、あの漢字ウサギで読むんデスカ。……ごちそうさまデシター！」

「……頂きました」

丼を屋台のおじさんに返し、二人は立ち上がった。その時である。

「グワーッ！」

突然の悲鳴。その声を聞いた花見客は、一瞬何が起きたのかわからずに呆けるが、すぐにパニックに陥る。

「今の声！ どこから？」

「シランレサーリ！ 確か、【いと美しくあなる桜】の方デス」

「まさか！」

◇◇◇

逃げまとう観光客に逆らい走る宇野、煮粗。小彼岸桜の咲く中で、惑う公園阿鼻叫喚。

うねうねと、蠢く根っこ、散る花卉。そこに囚われ動けぬ安曇。

「な、なあにこれえ……」

「……御石神の取り巻きか。遅かったな」

そこにあるのは、動き、しゃべる桜の木。しかし、煮粗にはその口調に聞き覚えがあった。

「内藤！ お前！」

「ふん、これ以上近寄ったら御石神の器を壊すぞ」

「……御石神様はごしたくて寝とるし、おらは九つで死ぬはずだった！ だからみんなをとっと飛ばして逃がさない！」

「ワタシは、運命とか、そういうの嫌いデス！ リヴ！」

しかし宇野の叫びとは裏腹に、根っこが安曇をきつく締め付ける。

「御石神のいない今、お前らに勝ち目はない。諦めろ」

そう言って咲いている花々の奥から、ドーンと大きな花粉団子を放出する。

「ワサイドドリ奥からドーン！ ユアラディカリ卑怯、フラワード内藤！」

そう言ってはいるが、花粉団子の影でちゃっかりとげんのうを投げ、内藤、いや、宇野の言葉を借りて、フラワード内藤の根に投げる。飛んできた花粉団子は、キルトの中から取り出した折り畳み傘を高速で開閉することで弾き飛ばす。

そして宇野の投げたげんのうは、一度安曇の横を通りぬけ、進行方向を真上に変更した後、一秒間に秒速十メートルずつ加速する勢いで、安曇を拘束する根の根本に真っ逆さまに落ちる。その一撃で安曇は開放され、げんのうは持っていた回転モーメントを、大きい跳ね返り係数で運動エネルギーに変換させられて、宇野の手元に飛んで戻る。

「おらなんか気にせんでも……」

「アイセイド、アイヘイト、エニフェイト。アユオコレ？」

「だども！ そもそもおらがここに来なければ……。かまけられても文句こけないだ」

「ならば！ あれを倒すのを手伝って下サイ！」

「……わかっただ。安曇呉霧、参らん！」

そして安曇は雪を固めて刀を作り、フラワード内藤に斬りかかる。

「アイイー！ ミシャクジサマ！？ ワラハプン？」

「……気無しにやっと思ったからといってなかっただ。このかんじるのはおらの力だ。御石神様のはあのげほうもねえ鉄だ」

そう言いながら、フラワード内藤の根っこを斬る。

「……まさか器の方にもこれだけの力があるとはな。だが……」

根っこをすべて土から抜き、体ごと回転するフラワード内藤。そのチェーンソーめいた根っこにより、安曇の刀が弾き飛ばされ、煮粗の眼の前に刺さる。

「煮粗、その刀貸すだ！ この魅こわすぎだから手伝わない！」

「いきなり貸すって言われても困るよ！」

しかし、安曇には煮粗の声を聞いている余裕もなく、右手の先に氷の刀を作り、斬りかかっている。その反対側では、宇野が左手で傘を高速で開閉させて滞空し、右手でげんのうを叩く。傘の動きはまごうことなき変態である。

彼らの雰囲気には押されたのか、煮粗も刺さっていた刀を引きぬき、フラワード内藤に斬りかかる。

しかしながら、フラワード内藤も負けてはいない。その大きな体――というか幹――を震わせ、飛び上がり、彼らを押しつぶさんとする。そのたびに三人は攻撃を一時中断し、回避に専念しなければならない。

更に厄介なのは根っこを伸ばして回転しながらの低空飛行。しかも安曇が動きを止めようと凍らせたが、逆にこの攻撃の殺傷力が増してしまった。さらに、これが厄介なため根っこは優先的に切っているが、あまりの多さに尽きる気配がない。

「……俺はお前らにかまっている暇はないんだ。とっとと諦めろ」

「彼岸の門を開かすわけにはいかんだ！」

「お前は知らないだろうが、杓子は杓子、定規は定規なのさ」

根っこチェーンソーを繰り出すフラワード内藤。回避行為を取る三人。しかしフラワード内藤は三人の方には行かずに、何もない方向に飛んで行く。

「え？ 逃げた？」

「.....逃げそっけた人から血い抜いてるなら！ 飛んでくだ！」

フラワード内藤の飛んでいった方へかける安曇。

「内藤.....。まあずいじむせえ！」

◇◇◇

「遅かったな。もう彼岸の門を開く準備は済んだ。あとは開くだけさ」

フラワード内藤の左側には、犬の死体。右側には、厚さ一メートルほどの大きな枠。

そして犬の血のついた根で器用に枠の内側に血を塗りたくる。

「これで、彼岸の門の完成だ！ 俺の勝ちだ、御石神の器よ！」

どのような原理かは分からないが、犬の血が枠の中に膜を貼り、不気味な音を立て始める。

「ああ、やめそっけただ.....」

フラワード内藤が彼岸の門に近寄る。

「いや、まだだ。まだ負けとらんだ！」

安曇も彼岸の門に近寄る。そして持っていた刀を使い棒高跳びのようにして、高く飛び上がる

。

「今さら何をしても遅いさ。御石神の器よ」

「ずでえ諦めたらそこで終わりだ！」

その勢いを殺さないように、彼岸の門の上の方を蹴る。

「な！ やめろ！ 俺はまだ」

「いいからかんたっぽれずに成仏しろ！ ごうがわくだ！」

「もはや俺もここまでか.....」

東風吹かば桜も散りぬかな.....」

彼岸の門がフラワード内藤を巻き込み、倒れる。

「安曇！ なんか大きな音がしたけど大丈夫？」

やっと安曇に追いついた煮粗が言う。

「.....おらは大丈夫だ。内藤もぎゅうせただ。ただちょっと後始末手伝ってくれない」

「いいけど、その内藤はどこなの？」

「.....彼岸の門を倒して、げいにとおさせただ。戻ってこないうちに、彼岸の門をぶっ壊すだ」

「その、彼岸の門て何デスカ？」

倒れた彼岸の門を見て追いついた宇野が言う。

「死んだ人を、この世に呼び戻すための、この世とあの世の境を創りだす門だ。自由に行き来で

きるから、なな創らと。気無しに通ったら……まんざら帰らすけ」

「ワ、ワッザ。……グラマー。バツ駄目デス」

「……いちゃついでるなら壊すの手伝っとくれだ」

「分かりマシタ。……イジル木？」

「木であっとるだ」

「……じゃあ」

すると宇野は懐からマッチを取り出し、彼岸の門に火をつけた。

「……もっと燃えるがいいデス」

「いや、燃え広がったら大変だから」

「きっとクレムサンが熱を奪って火を消してくれマス」

「そんなこともできねえずくなしじゃねえだ」

「じゃあ……いいのかな……？」

こうし足掛け二日に渡る内藤との戦いは幕を閉じた。彼岸の門は燃え尽き、二度と開かれることもないだろう。

警察や消防が来る頃には、彼岸の門は、消し炭になっていたため、警察にはボヤ騒ぎとして処理された。

◇◇◇

十五時三十分。高遠城址公園。

「え～。ボヤ騒ぎもありましたが、これで一年一組の新学期懇談会を終わろうと思います！ ……まだここにいてもいいけど」

煮粗の声が響く。かなりグダグダ、集合して、移動して、実際即解散だったこのイベントだが、未だ学校が始まってから一週間のこのクラス内の団結力の向上に繋がったことには間違いはない。

「それでは、かいs」

「ちょっと待って、煮粗。先生からの伝言、明後日は配布物があるらしいから学校には八時五十分、Bの二教室に集合とのことこれす。僕からは以上」

「……紀家の他になんか用ある人いる？ じゃあ、これにて、解散」

そしてそこからは、まだ祭りを楽しむ派、他のところに行く派、帰る派の大体三グループに別れ、それぞれの休日を楽しむのだった。

四月十四日、月曜日、午前八時五十分。

「えーすみません。僕の不注意で朝早めに呼んでしまって。一昨昨日に渡すはずだった部活入部希望調査票を渡し忘れていました」

そう言ってはがきサイズの紙を配布する沢渡。

「書き方は裏面に印刷してあるので、それに習って記入して下さい。土曜日に回収します。僕からは……あ、後、今日の五限目の日向先生の地理Aの授業は担当教員の食あたりのため休講との連絡がありました。Cの三教室でおとなしくして下さい」

食あたり。その言葉に教室がざわつく。なんとも情けない理由なんだ、と。

そのざわめきも、魔法の十六の音に打ち消され、一限目、生物基礎の授業が始まる。

「改めまして、おはようございます。本校の高一生物基礎一単位と、高二生物二単位を担当する沢渡 三雄です。それで、今年度の授業計画ですが、一学期は生物と遺伝、二学期は生物の体内環境、三学期は生物の多様性についてやろうと思っています。……では始めます。今回は生物と遺伝、ということで、まずは初回なので、遺伝、とはどういうことか、の中学校の復習からおさえていきたいと思います」

すると沢渡は黒板に緑色のチョークで四つのモデルを書く。一番左のものはしわしわグチャグチャで、他の三つはフリーハンドとは思えないほどきれいな円だ。

「これは枝豆です。枝豆だと思って下さい」

そう言うのと左のモデルから、順に  $rr$ 、 $rR$ 、 $Rr$ 、 $RR$  と下に記す。

「それでは、この時、 $R$ は $r$ に対して何と言うか。じゃあ……今日は十四日だから、出席番号十四番の……鮫島」

「優性です」

「正解」

下に $R$ は $r$ に対して優性と書き足す。

「それじゃあ、両端のように、同じ対立遺伝子を持つものを何と言うか。十四に今月は四月なので四をかけて、五十六なので二周目の二十六番、守山」

「ホモ接合」

「はい正解。じゃあ真ん中二つのように違うものを持っているのはなんというか。今度は四を足して、三十番、井川」

「……忘れまして」

「……ヒントを言うと、ホモの対義語です」

「……わかりません」

わからないことを素直に分からない、というのはいいことである。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥、とはよく言ったものだ。

「じゃあ次。三十を四で割って整数に切り捨てて七番、宇野」

「ヘテロデス」



「正解」

そして黒板に補足を書き入れる沢渡。

「それで、特に一番左、劣性……あ、優性ではない方のものを劣性と言います。その劣性のみホモ接合を特に劣性ホモと言います。この劣性ホモは重要な単語ですので、確実に覚えて下さい」

劣性ホモ、ヘテロ、ヘテロ、優性ホモと記入する。

「じゃあ、この劣性ホモの具体的な利用方法を、七から四を引いて、三番、東風」

「優性が発現してる個体と掛けあわせて、ヘテロかホモかを調べるのに使います」

「具体的には？」

「表現型劣性の子供が生まれればヘテロ、そうでなければみんなホモ」

「正解。ではここまで確認したので、僕が作ってきたビデオを見てみましょう」

すると沢渡は準備室からタブレットを持ってきて、教室にあるプロジェクターと無線接続し、動画ファイルを再生する。

ブヒ、ブヒヒヒ。養豚場が映し出される。沢渡の実家だろうか。そして俗に柔話ボイスと呼ばれるひどく棒読みな人口音声でナレーションが入る。

「遺伝。それは、親の形質が子に受け継がれることである。これを利用して、様々なことが行われている。例えば、先生の実家の養豚場の場合、病気に強い、成長が早いなどの有利な形質を選択的に受け継がせ、逆に脂肪を多く貯めこむなどの不利な形質を排除する。これを選抜、淘汰という」

有利な形質⇒遺伝させる（選抜）、不利な形質⇒遺伝させない（淘汰）、とテロップが入る。

「この時、不利な形質の排除は劣性ホモ以外の選択肢はない。しかし、有利な形質の継承には、ホモとヘテロの二種類がある。この時、どちらのほうが都合がいいだろうか」

画面がワイプし、ホモ、ヘテロと大きくテロップが入る。そして五秒程度の間を開けた後、タイマーの効果音が流れる。それが流れ終わると同時に、ヘテロの文字に大きくバツが浮かび、テロップが暗くなる。それと同時に、ホモの文字に大きくマルが描かれる。

「答えはホモである。なぜならば、ヘテロ同士をかけ合わせると、四分の一の確率で劣性ホモ個体が生じるからである。特に、近親交配の多い牧場などでは、ヘテロは忌避される傾向にある。故に、最近は大体の家畜はホモである」

メンデルの遺伝法則を描いた図を表示しながら、最近の家畜のトレンドを紹介する。たとえ興味が無いとしても、テストに出る可能性がある以上、聞かなくてはならない。

「しかし、現実はそんなに甘くない。形質によっては、ヘテロの状態が最も良い物もある。これを優性効果があるという。しかし、この場合は交配する際に近交係数が……」

もはや積極的に聞いている人のほうが少数派になっている。だが、沢渡は何かの書類を作成しており、気にする様子もない。

そのような空気を延々発し続け、九時五十分、一時間目の授業は終わる。

その後の二限目の数学A、三限目の政治経済、四限目の現代文の授業は、初回ということもあり、ほとんど自己紹介と個人的な質問ばかりで、沢渡のように授業らしい授業をした先生はい

なかった。

◇◇◇

十三時三十分。Cの三、地理科教室。昼休みも終わり、自習の時間である。ただ、多くの生徒は雑談していたり、昼休みで食べきれなかったお弁当を食べていたり、自習、というものの本来の意味とはかけ離れたものになっているが。

「にしても初回から自習とかひどくない？」

煮粗の問いかけに対し、大量のアルファベットの書かれたプリントから目を離す宇野。

「よくあることらしいデス。エン昼休みに魔術部行た、ヤンタサンに『五限目は地理デス』言たら『自習ですか。資料渡しますから解析して欲しいんですな』と」

「……え」

「『日向先生は三週間五自習は当たり前、三週間八自習もありますぞ』て」

「……な、何それ」

「アコディントゥアダー先輩『計測中の娘の体温計を一睨みしただけで表示が二度くらい上がった』『昨年度本校の十大事件、第一位【日向先生の一週間無自習】』『グッとお腹を抑えただけで食あたり』」

ひどい言われようだが、これはこの学校の二年生以上なら誰でも知っている事である。日向は高一しか担当しないのが、唯一の救いである、とまで言われている。さらに三年生にもなると、「二年生担当の相模先生——かなり熱心で、カリスマにあふれていて、慕っている生徒も多い——の授業との格差は、涙すら流れる」というのが一般的な見解らしい。

「な、なんで解雇にならないんだろうね……」

「『給料泥棒されたことにまだ気づいていない事務員も多いですね』て言てマシタ」

「えー……。それはさすがにネタでしょ……」

さすがにここまでやる気のない先生なんて存在しないだろう。

「……それはもう考えないことにして、それ、なんの文献？」

「フィリップス・ノートというWWⅡの時にUSAで書かれたパシビリティオブコパー」

「ど、銅？」

「コパーロイズァヴァンリミテパシビリティズ……銅合金持っている制限されていない可能性、て書いてあります」

「ごめん、邪魔して悪かったね」

若干顔をひきつらせて言う煮粗。どちらかと言うと、邪魔して悪かった、という感情よりは話についていけないからやめてくれ、という感情のほうが大きいように見える。自分で話を振っておいての態度であるから、非常に自分勝手だ。

その時である。地理科教室に彼女が入ってきたのは。

「紀家さんはいらっしゃいますの？」

「前での方にござるだ。おらが呼ばるだ。……紀家！ 駒ヶ根先輩がよばってるだ！ ちゃっと

こい！ えぶな飛べ！」

「れけえこえれ言わんれもわかるんよ！」

そう言って走ってくる紀家。

「それ、なんれすか？」

「明日からの研修用資料を持ってきましたの。日向先生の授業は自習って事はわかってましたので、直接来ましたの」

「これれすね。確かに受け取りました」

「受け取り、確認しましたの。……では、私はここでお暇させていただきますの」

そうって地理科教室を出て、普通棟の方へと去る駒ヶ根。

……そういえば、駒ヶ根の所属している三年一組は、自習だったのだろうか。

◇◇◇

十五時十八分。Aの1、第一視聴覚室。

「それでは、学籍番号でアカウント登録を終えた生徒から、今日の授業は終わりとします」  
情報の科学の授業を担当する周防先生の掛け声とともに終わる授業。

そして、放課後が、始まる。

帰る生徒もいれば、部や同好会の見学に行く人もいる。級友たちとの雑談をする生徒が多いのも、入学直後だからであろう。

特別・部活棟四階。Dの3、魔術部部室前。この階は、Dの一からDの五まで、全て部活の部室となっている。

「あ、ハルカサン。またチマコサンの手伝いデスカ？」

「そうなのよね。わからない回路を解析するのは達成感があるのよね。ただ、小町屋先輩は何でもかんでもオスミウム使うから細かい回路はすぐに切れちゃうのよね」

思わず愚痴をこぼす大田切 春香——魔術部の二年生——。

「確かに、モスト左下のオスミウムは火力がすごいデスガ細かいとダメデス。逆に右上のニッケルは細かいのに使えます」

「……左下とか、右上って？」

「ピリオディッティボデス」

「……周期表？ ……梃子にドアが、だから銅じゃダメ？ ニッケルなんて在庫あるわけないです」

「細くてもいぱい流しても切れマセンガ、反応は起きマセン」

「魔力は通るのね。じゃあスコープを使えば見られますね。やってみる価値はあるわね」

ニッケルと銅では、流通量は雲泥の差だ。もちろんオスミウムよりも入手しやすい。

しかし、魔力を流しても何も反応は起きないため、魔力の流れ方を見る以外に、今のところ使い道はないが。

「……で、そういう宇野もなんだかんだで副部長の手伝いでしょ？」

「ワタシはおのづからやってるのデス。……あ、そういえば」

「……何？」

「クレムサンは今はステイン長藤、でもボーニン渋川郷らしいデス」

大田切は小町谷に頼まれ、魔法陣もなしに魔術を使った安曇の体内にあった魔術回路を解明しようとしていた。大田切にとって、安曇の出身地がわかれば、その土地固有の何かを探ることができるので、宇野にあらかじめ頼んでおいたのである。

「渋川郷？ もみじ湖の近くの？」

「ダムでオンリ道のマインの入口が沈んだて言てマシタ」

「じゃああの三年前に伝染病で全滅した渋川郷なのね。実地調査が必要かも！ 今は二十三分…二十七分のバスに急げば間に合うわね。部長には調査に行ったって言うておいて」

その時部室の中から都合よく人が二人出てきた。小町屋と福島だ。

「その必要はないわ」

「話は聞かせてもらいましたぞ。我らも向かいましょうぞ」

「ヤンタサン、フィリップスノートの解読」

「それはバスの中で聞きますぞ。とりあえず今は乗り遅れないように急ぎますぞ」

◇◇◇

用明帝三年。都を追い出された我々は、四方を山に囲まれている理想的な土地に辿り着いた。さすがにここまでくれば都の者共も追ってこないだろう。ここで体制を整え、もう一度都に返り咲くのだ。

幸いにも、この場所の近くの農夫たちは、都で試作した鉄製の鍬を与えたらすぐに言うことを聞くようになった。これで武士のめどはたった。

さらにこの土地の土には鉄が多いようだ。これを利用すれば、武器のめども立つ。

後は都にいた時の部下と密通して、あいつが忘れた頃に、あいつを倒すのだ。

俺を都から追い出そうと画策した、あいつを。

いまごろあいつは俺の持っていた権力で政を牛耳っているのだろう。

その間に去年の忌々しい戦――軍部の俺が、財務のあいつに負けるという戦――からの復興が終わる頃まで、おまえに権力を預けておいてやろう。

蘇我馬子。

◇◇◇

十五時四十三分。長野県伊那市、高遠町藤澤、北片倉停留所。

ここから県道四百二十二号線に向けて峠越えの細い道がある。

藤澤川と沢川の分水嶺まで走って十分。そこからさらに獣道を二十分。長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪、渋川郷の廃墟群に到着した。

「ここが……渋川郷ですか」

「どうみてもただの村の跡地ね。本当にここに御石神がいたの？」

「わかりませんな。とりあえず調べますぞ」

そう言って一番近くの小屋に不法侵入する福島。それに続く三人。

「特にめぼしいものはありませんな。他の小屋も調べますかな」

「じゃあ男女で二つに分かれて、あの洞窟のところで落ちあいましょう」

◇◇◇

用明帝四年。ここにきて一年が経った。

昨年農具を渡した農夫から、貢物として作物をもらった。別にそんなことはしなくてもいいのだが。お礼として鉄の鍬をもう一つ渡しておいた。

崇峻帝四年。都の黒田から書簡が来た。俺が追われた年に、崇峻帝が即位したらしい。案の定馬子は政を縦にしているようだ。

また、我々の事をよく思っていなかった農夫たちがまとまって攻めてきたが、谷間から大量の矢を射って降伏させた上で、鍬を与えて味方に引き込んだ。

その際名前を聞かれてしまったが、氏はバレていないので、大丈夫だと思う。

崇峻帝五年。農夫たちに神様と祭り上げられていた。かなりはづかしいが、異国の神を討つにはその程度の器は持って然るべきなのであろう、と考えを変えることにした。

崇峻帝六年。都の黒田からまた書簡が来た。馬子はどんどん力を伸ばしているらしい。

また、書簡によるとこの書簡を出そうとしていたところを馬子に見られかけたので注意してほしい、とのことだ。どこまでアイツは俺の邪魔をすれば気が済むんだ。

◇◇◇

「なにか成果はあった？」

「いや、我は特に何もありませんでしたな」

「ワタシはシュラインの奥の草むらでかわいいストラップを見つけマシタ」

そう言って薄く黄色のかかった金属の蛇のストラップを見せる宇野。

「私は特に何も。後は湖底につながる洞窟だけね」

「そこは多くの調査隊が通ってるはずだから、なにもないと思うけど」

ただ斜面にポツカリと空いた穴。自然に出来た洞窟であるため、当然足場も悪い。

「照明はある？」

「昨日家で作った鉄の魔法陣がありますぞ」

「非常食は？」

「ここにありますがね。先輩」

「なら大丈夫よ。……宇野君。君はここで帰りなさい。あなたにも家族がいるでしょう」

「いマセン。単身赴任デス」

「……それは仕事の時に使う表現ですぞ。貴殿の場合は留学といいますな」

「……明日は直接学校に行くことになるかもしれないけど、それでも来る？　こうかいしませんね？」

「ヨロコンデー！」

「じゃあ行きましょう」

そうして四人は洞窟へと入っていった。

◇◇◇

崇徳帝七年。この土地におはします神が俺の前におはせさせ給われで、採鉄場の前に社を作らせ、昨年偶然見つけた山銅と鉄を混ぜて溶かしたもので像を作った。神はそれをいたく気に入り給われ、御命を吹き込ませ給われた。

崇徳帝八年。この土地におはします神、俺の体のすでに神のに近づいてきているのを告げられた。あと数年もすれば神というにあたうとのことらしい。俺はただ食物をくれたので鍬を上げたただけだと言ったが、食べればなくなるものを渡して、未来長い間使える便利な鉄の鍬を与えていれば、自然と俺を信じるものは増える、と神は言った。

崇徳帝九年。都の黒田が書簡を寄越した。馬子が科野へと兵を挙げるらしい。俺は息子にこの村を任せ、社の裏の鉄をほった穴の奥に移り住むことにした。

◇◇◇

渋川郷へのかつての道は、すぐにダム建設で水没した箇所へとさしかかる。

「……ここまで何もありませんでしたな」

「この先、行く？」

一寸先は水、である。未だ雪も溶けきっていないのに、着衣水泳など風邪をひくだけである。

このままここにも仕方がないので、小町屋は左壁を、大田切は床を、宇野は右壁を、福島が天井を細かく調べながら引き返す。

「あれ、この蛇みたいなの、なんだろうね」

大田切が黄色のかかった銀色の蛇のようなものを見つける。

「……さっきワタシがシュラインで見つけたのと同じデス」

宇野がポケットから先ほどのストラップを取り出す。見た目は全くと言っていいほど同じだ

った。

「そのストラップは何も関係ないわ。錆びてないもの。調査に入った人が落としたものよ」

「【だろー運転】は部長殿の悪い癖ですな。こういう時は、もしかしたらなにか関係有るかもしれない、と【かもしれない運転】のほうが安定しますぞ」

「あんたはいちいち説教臭いのよ。第一、」

リンドン、リンドン、リンディンドン。突然響く、ベルの音。

「先輩！ こんなところで喧嘩してる場合じゃないですよ」

ベルを鳴らして注意を惹く大田切。だがしかし、それは小町屋の怒りを大人買いしただけだった。

「いつもいつも、なんであんたたちは私のプライドを傷つけてばかり」

「そんなくだらないプライドは揚げて食べちゃって下さいね！」

ファ、ソ、ラ、シ、ド、レ、ミ、ファ、ソソソソ……。音階を上げながら、容赦なく小町屋をベルで殴る大田切。

「殴るたびに音階を上げてく技術、すごいデス」

「問題はそこじゃないですな。ベルは鈍器じゃないですぞ」

「……あー。スッキリした。福島先輩、先輩を輸送するのを手伝って下さいね」

日頃のうっぷんを晴らした大田切が小町家を引きずって言う。制服やベルが劣化するので、やめてあげた方がいいのではないだろうか。

「部長殿は重いからあんまりやりたくないんですがな。宇野殿、詳しい探索は任せますぞ」

「ベルの音の返り具合からして変な場所はないデス」

先ほどの大田切の鳴らしたベルの反響で分かったというのだろうか。ものすごい聴覚である。彼の前世はイルカや蝙蝠のような生き物だったに違いない。

「もしかしたらあるかもしれない、ですぞ」

「分かりマシタ」

そうして壁をげんのうで叩きながら出口へ向かい始める宇野。

「……彼はどっかの誰かさんと違って頑固じゃないのでいいですな」

「だよーね。誰かさんもこれくらい素直だったらよかったのにね」

壁を一心不乱に叩き続ける宇野を見て、婉曲に小町家の悪口を言う福島と大田切であった。

◇◇◇

崇徳帝十年。都から兵が来た、というので、部下に命じて監視させた。

都のことを褒め殺したら、簡単に同行許可が出たらしい。そんなんでいいのだろうか。

彼らは農夫の使っている鉄の鍬を見て驚いたらしい。俺が都にいた時はまだ鉄が外れて使い物にならなかったのだが、そこから技術は進んでいないようだ。

そして農夫に、この鍬は誰からもらったのか、というのを聞いた。その農民は、『名前を言ったら崇られてしまう』と俺の名を言うことを拒んだ。口封じが聞いているようだった。

しかしながら、馬子の入れ知恵だろうか。彼らはスサノオノミコトがヤマタノオロチを倒した時のように、農夫に酒を振る舞ったのだ。

そしてよって口が軽くなった農夫に対し、もう一度鍬の出处を聞いた。そして農夫のうちの一人が、言ってしまった。

しかし、それを聞いた部下がとっさに俺のことを隠そうと嘘をついたので、朝廷にはばれなかった。農夫たちが全員酔っていたのが幸いだった。ここで反論されては、かえって俺の身が危ない。農夫たちがよって笑い飛ばしていたからこそ通せた嘘だ。

そしてその翌日、土産に鉄の鍬を『朝廷への献上品』として持たせ、都へと帰らせた。

◇◇◇

「宇野殿、そのストラップはどのへんで拾ったんですかな？」

「バコウシュライン」

「じゃあ神社のところを探しますかな」

日没も迫り、電気もガスもないこの集落跡地での探索時間も残り少ない。闇の中で何か、それもあるかどうかすらわからないものを探すなど、ばかばかしいにもほどがある。

廃村の東のはずれ、神社跡地。

境内の砂利を突き破って生える雑草に、人がいなくなってからかなりの時間がたっていることを感じる。安曇が本当にこの村で育ったのかも疑うほどに。それを福島が尋ねると、

「アコッチントゥイン、五年前から一度も村に戻っていないデス」

と返す。つまり安曇殿がこの村を出た後にこの村から人がいなくなった、ということだろう。

「証拠はあるんですかな？」

「裏の壁に、きれいな模様があるインサンセとも言てマシタ」

「それを先に言えですぞ。神社の裏に行きますぞ。いい加減部長殿重すぎて辛いですからな」

そうやって神社の裏へ回る福島と宇野。あと小町屋。さすがに神社の中を歩いていく気にはなれないので、壁に沿って回る。

そして神社の裏に行くと、大田切が少し震えながら立っていた。

「おや、大田切殿。どうしましたかな？」

「あ、福島先輩。こ、これ……」

そうやって神社の壁を指さす大田切。そこにあったのは、なんと直径が二メートル以上もある大きな魔法陣だった。

「こんな大きな魔法陣は、見たことがないですな。御石神様のものも、三尺三寸って言っていましたからな」

「それより、この魔法陣、どういう魔法なの？」

「我は専門分野外なので知りませんぞ。宇野殿、この魔法陣の材質は何ですか？」

そうやって自分の専門分野を調べる福島。これを専門としている小町屋は、残念ながらまだ気絶している。



「音の反射的に他の部分めいた木デス。ナツメトー」

「木？ 木の魔法陣はあり得ない！ ああもうこうなったらやけですな。部長殿、いい加減起きますぞ！」

魔術というのは遷移元素の外側から二番目の空いているd軌道に、動摩擦力によるエネルギーのロスによって生まれる魔子が入り込み、それが電流における電子のように流れ——これを魔流という——、それが複雑な反応を起こして発生する現象のことである。福島のように、その多くが炭素や水素、酸素に窒素で構成された木材には、魔流は発生しないので、魔法陣を形成することはできないのだ。

福島は、小町屋を投げ飛ばした。そして懐からカードを取り出し、空中の小町屋に当てる。爆発する。落ちる。制服が激しく傷みそうな行動であるので、やめさせたほうがいいと思われるが、だれも止める人はいない。

「あれ、まだ起きないの？ じゃあしょうがないね」

「あんたら、いい加減に加減というものを覚えなさい」

「貴殿が言うなですぞ」

「部長がそれを言うんですね？」

「うっ……」

見事なまでのブーメランである。普段から加減を忘れて研究に没頭し続け、福島や大田切に迷惑をかけていたことは忘れていたようだ。

そんな空気を見無視して、宇野が小町屋に魔法陣について尋ねると、

「何この馬鹿でかいやつ！ ……でも左右反転してるわね」

と答えて、魔法陣に近づいて詳しく説明しようとする。

「ええ、特にこの右下の部分は、この向きじゃ北半球だと駄目ね。裏側から発動させれば……ってえ？ 消えた？」

小町屋が魔法陣に触れようとする、壁の魔法陣が……消えた。いや、小町屋に映った。

「いや、切れた部分は貴殿の体に映ってますぞ。つまり、これは、太陽光の反射ですな。ということですから……」

廃村の東の崖を見る福島。

「魔法陣の本体は、あの崖にありますな」

「……面白くなってきたわね。こんなところに魔法陣を仕掛けるなんて」

「行きましょう！ 何か発見があるかもしれませんね！」

「ダズリン！ ……シラバウシク、タンジェンシラバウツェロポイント。オーコレット」

神社の建物から、二十メートルほど離れた崖には、西日に輝いた魔法陣が、顔を出していた。日が西に傾いた夕暮れ時でなければ、見つけることは困難を極めただろう。

「って、地味に高いところにあるわね。高さは……」

「アバウトゥミラ」

「めんどくさい。福島、なんかない？」

「なんか、と言われても困りますぞ。一応遠隔魔法陣起動用の鉄の棒なら持ってますがな。二メ

「一トールなら手で届くので不要ですな」

「貸しなさい、私は届かないのよ」

「.....部長殿のやろうとしていることを考えますと、絶対に貸せませんな」

「なんでよ」

「効果もわからない魔法陣を発動させるなんて、言語道断ですぞ」

もし、その魔法陣が安全なものなら良いが、危険なものである可能性は否定できない。そもそも、「甲ならば乙である」の証明は簡単だが、「甲ならば乙でない」の証明はほぼ不可能な、悪魔の証明だ。

「い、いや、私は専門分野だからわかるわよ」

「じゃあ説明しろですな」

「見せたほうが早いわ。実演する」

「.....念のため、我らは退避しますぞ」

「勝手にしなさい」

そして福島、宇野、大田切が三メートル近く離れる。それを確認して小町屋が魔法陣を起動する。地響き。揺れ。転ぶ小町屋。

「って部長殿これ本当に想定してたんですかな？」

「十中八九してないですね。転んでますからね」

割れる崖。洞窟が口を開ける。

「こ、これ.....」

「洞窟、それに、階段、ですな」

あからさまに人工物な階段。奥からうっすらと見える光。それは、彼ら四人を誘っているようにも見えた。

◇◇◇

崇徳帝十一年。いや、穴の中ではもはや今が何の刻かも分からないので、もしかしたら崇徳帝十一年ではないかもしれないし、すでに崇徳帝が崩御なされていることも否定できない。

黒田から書簡が来た。朝廷が異国の神への信仰をさらに強めたと聞き、俺は都とのかかわりを捨てた。氏も捨てた。黒田との書簡のやり取りもやめた。これ以上のやり取りは、黒田の身も危なくなってしまう。ただ、黒田の子孫が蘇我を打ち滅ぼすことを夢に見て.....。

もはやあれから何年たったかも俺には分からない。時々、御石神様や外の村のものが外の様子を教えてくれる。豊富な鉄を使って、万のことに使えば、穴の中の暮らしは都にいた時よりも便利になった。もう、外とのかかわりを持つ必要も、それほどないだろう。

俺は、御石神様と認められたものだけがこの穴に入ってこられるよう、穴に蓋を施した。この穴の中に、異国の神が入ってこないように.....。

「上様、上様！」

「どうした？ 何かあったのか」

「穴の蓋が、外から開けられました。御石神様の気配もありません！」

「……面白い。外の様子も気になっていたところだ。ここまで導け」

「はっ」

あれから、多くの部下も老いて死に、その子供も老いて死に、もはや第何代目か数えるのもおっくうになってきたが、俺は老いることもなく生きている。

御石神様曰く、「そこの身、ここのおやじき身の、人とおやじからざるは、人の矢を射で、ここ損することなかり」と。老いて死ぬこともなければ、病気にかかることもない。ただ産出される鉄や銅を使って、新しいものを作るのが唯一の楽しみとなっていた。

この訪問者は、俺に刺激を与えてくれるのだろうか。

◇◇◇

地下深く、明らかに手で掘られたと思われる階段を下る四人。下れば下るほど、鉄の香りがきつくなっていく。光は強くなっていく。

後ろから音がする。何かがしめる音。恐らく、先ほどの崖の入り口だろう。もう、後戻りはできない。

沈黙。ただ階段を下る音だけが、暗い洞窟に響く。

光が近づいてくる。人の声が聞こえる。

「ってなんでこんな地下深くに人が住んでるんですかな。ありえませんか」

「分からない。でも、魔術回路が見えるわ。きっと魔術を使った文明……」

「こういうのって、帰ってから人に行ったら二度と来れなくなるってオチですね」

「大田切殿、そういうことを言うのはやめろですぞ。というか、あんな場所迷い込まなくても言われれば見つかりますから、そんな心配多分要りませんな」

階段を降り切る。大きな、真っ赤な門。その奥には、十メートルを超える幅の道。まるで、平安京だ。決定的な違いといえば、その道や、門、壁などが、すべて光っている、いや違う。金属光沢をもっているところだ。

漂う鉄の香りは、これらから出ていたのだろう。

ふと上を見上げると、そこには小さな光の点。それぞれが光の強弱や色彩を変えて、まるで大空のようだ。

「部長殿、大丈夫ですか？ 顔色悪いですぞ」

「そ、空……。あれ、全部魔術回路で埋め尽くされてる……」

「……これは、予想以上の大発見ですね」

上を向いて歩く三人。それを不審に思った宇野が、声をかける。

「ミナサン、なんで上ばかり見てるんデスカ」

「門の内側を見たら、今までの研究すべてが無駄になる気がするからですぞ」

「見マシヨウ、現実」

「いや、あのですな、劣等感というものがあってですな」

「.....インフェリオリティフィリングザーヴェリーンプータントゥグロウイング、バットイトマ  
ストウンテューズィットウラナウェイフロニアティ」

「日本語でよろしくですぞ」

「劣等感はとても重要ために成長する、しかしそれをしてはいけない使うそれを逃げるから現実  
、というわけで前を見マシヨウ」

その門の内側では、子供が空を飛んでいたり、主婦がごみを燃やすためにマッチすら使わずに  
火をつけたりしていた。

「我々の研究は、何だったんですかな.....」

「なんというか、ここまで来ると馬鹿らしいわね.....」

「見事なまでのインフェリオリティカンレクス.....。ハルカサン、どう思いマス？」

「先輩たちも、落ち込んでないでここから学ばばいいのにね」

「ハルカサンは、劣等感の使い方が上手デス」

「.....それ、褒めてるんだよね？」

「イエス」

専門的なアドラー心理学はともかく、この地下都市の魔術論理は、魔術部のそれよりもかなり  
進んだものであることは、だれの目から見ても明らかだった。

そんな中、幅の広い道を飛んでくる男が一人。そして、彼は四人の前で止まった。

「お前らが、蓋を開けた者たちだな？」

「蓋？ あの崖の扉ですか？」

「.....つまりお前たちか。上様がお呼びだ。着いてこい」

「どうしますかな？」

「着いて行きましょう。その【上様】がどんな奴か、気になるし」

「そうしまシヨウ」

そして四人は、やってきた男についていった。

その道中。彼ら四人は村人たちに奇異の目で見られていた。それを不審に思った福島が男に尋  
ねると、

「ここでは外から人が入ってくる事自体少ないからな」

と言う。

「そりゃああの状態じゃそうなりますな」

「むしろ我々にとってはお前たちが入ってきたことのほうが不思議だ。だから皆お前らを奇異の  
目で見ると、上様もお前たちを呼んで来いといわれたのだろう。.....着いたぞ」

そこには大きな、金属で作られた屋敷があった。その屋敷こそ、「上様」の住む屋敷である。

四人はその屋敷の中に通された。

「私はこの者たちだけと話がしたい。お前らは出ていけ」

「はい」

通された部屋から四人を連れてきた男が去り、その部屋の中には四人しかいなくなった。部屋には窓もなく、扉も先ほど入ったところのみ。無機質な部屋である。

「ってこれもしかして監禁されてませんか？」

「あっ監禁……」

「え？ たしかにそうかもね」

「ですな。宇野殿、壁こわ……宇野殿？」

宇野は、部屋の隅で震えていた。顔から血の気は去り、苦しそうにしている。

「どうしましたかな？」

「ノォ……アイドンワナリメンバー……アイドンワナゴバクトゥヘウ……」

「落ち着けですぞ。……もしかして、閉所恐怖症ですか？ 我が監禁なんて言わなきゃよかったですな……」

「あんたまで共倒れしない！ 全く。しばらくしたら開くでしょ」

そう小町屋が言った瞬間、扉が開く。

「ほらぁ。宇野君、大丈夫？」

「大、丈夫、デス……」

肩で息こそしているものの、宇野の顔色は戻っていた。

「おっと、これはどうやら悪いことをしてしまったようだ」

突然、扉の裏から聞こえる声。そこには、男が立っていた。

「……誰ですか？」

「おっと、これは失礼。俺の名は守屋。一応ここ、渋川郷の長をしている。氏は遠い昔に捨てた。その赤い髪の少年には、不快な思いをさせて申し訳ない」

「とすると、あなたが、【上様】なのね。私は小町屋美智子といいます。一応この集団のリーダー……長、です」

このような地下深くにあっては外来語は通じないだろう。ゆえに小町屋はリーダーを長、と言い換えたのだ。

「ああ、部下にはそう呼ばれているな。……こちらからも一つ質問をしていいか？」

「ええ、お構いなく」

「助かった。こんなところに隠れ住んでいる以上、外の状況はあまり入ってこないのにな」

そう言うと守屋は咳ばらいをした。どんな質問が飛んでくるのか、四人は期待と不安を抱きながらその質問を待った。守屋が口を開く。

「……蘇我の家は、未だに栄えているか？」

その質問は、彼ら四人を驚愕させるには、十分すぎるものであった。沈黙。ただ時間だけが過ぎていく。

「いや、分からないのならいいのだが……」

「分かるのですがな……。なんといいですか、あの、どのような答えでも驚きませんか？」

「ああ、朝も夜もないここでは、外でどれだけの時間がたったのかわからないのでな。驚きません」

「分かりましたぞ。……蘇我氏は、千年以上前に中大兄皇子と中臣鎌足の手によって、滅亡しましたな」

再びの沈黙。

「……外では、もうそれだけの時間が過ぎていたのか。それに、中臣……。黒田、お前の子孫が、その偉業を成し遂げたのだな……」

感傷に浸る守屋。それを見て、福島が何やら考え始める。

「渋川郷……渋川？ あの、まさかとは思いますが、守屋殿が捨てられた氏、というのは、もしかして【物部】ではないですか？」

「……よくわかったな。物部守屋、それがかつての俺の名だ。もともと、朝廷が異国の神に懐柔されたと聞いて、その氏を捨てたがな。さて、こんなところで立ち話もなんだ。座敷に案内しよう」

そういつて奥へと戻る守屋。そのあとについていこうとすると、小町屋と宇野が福島のもとにやってきて、小声でささやく。

「物部守屋は千年以上も生きてる、って言いたいよね？ あり得ないよね」

「この魔術文明の上では可能なのかもしれませぬぞ」

「物部守屋は丁未の乱で死んだ、古事記にもそう書いてあります」

「奈良時代の歴史書なんて、間違いばかりですぞ。嘘をつく意味がどこにあるんですかな」

「でも……」

「仮に嘘だとしたら、どこかでボロが出ますぞ。それまでは信じるべきですな」

「……分かりマシタ」

「まあ、守屋殿についていきましょうぞ」

◇◇◇

守屋の屋敷、とある部屋。

「さて、こちらからも聞きたいことは山ほどあるし、そちらも同じだろう」

「ですな。交互に質問していきましょうぞ。貴殿からどうぞ」

「ああ。あの後、異国の神がどうなったのか聞かせてくれないか」

「それについては私が説明しますね。簡単に言うと、棲み分けがなされたのですね」

「棲み分け？」

奈良時代において、異国の神……つまり仏は死後の世界を、国の神は現世を司る……。そのような棲み分けがなされた。これにより、互いは干渉せず、両方を信仰する者も多い。そう大田切が守屋に告げると、守屋は一瞬だけ神妙な顔をした。

「それじゃあ私たちからも質問しますね。ここに来る途中で見たんですけれど、子供が空を飛ん

でいたり、おばさんが火をつけていたりしていたのですが、あれは何なんですかね？」

「……普通の力ではないのか？」

日常的にそういうことをしていれば、それが普通であるように見えてくるのは、当たり前のことであろう。

「普通？ あれは普く通じるのを超えててますな」

「そうなのか？」

「ええ。私たちから見れば、えー、一二点で返して【超普通】と呼ぶことにしますが、あれはかなり異常なものなんです」

「俺から見ればもうすでに普通なのだが。……ちょっと待ってくれ。思い出したことがある」

そういうと守屋は、一度部屋を退室し、一分ほどでベニヤ板のようなものを持って戻ってくる。

「……あったあった。あれができた当時のことを日記に記しておいたんだ。これを読んでくれ」

そういつて守屋は福島に板を渡す。それを三人が覗き込む。

その日記には、次のように書かれていた――

山銅鉄を作らせている男のうち一人が、指先から火を出せるようになったと言ってきた。調べてみると、彼のように山銅鉄を作っている者どもは、皆彼のように不思議な力を持っていた。

これは詳しく調べたほうがよいと思ったので、試しに一人、山銅鉄の工場に異動させた。

この不思議な力について、分かったことがある。

この力は、持っているもの一人ひとりそれぞれが違う力なのだ。

最初に報告してきた者は火であったし、ほかの男は水を操る。とある女は石の音が聞こえ、ある者は空を飛ぶ。

そして興味深いのは、それぞれが持つ力は、一人一つである、というところだ。

異動させた男が、不思議な力に目覚めた。どうやら、この不思議な力は山銅鉄が原因で間違いないようだ。

ちよくちよく顔を出していたからだろうか、俺も不思議な力に目覚めた。しかしこの力が何なのか、全く見当がつかない。

不思議な力を使っている者の頭に、緑色の光が見えるのだ。これは、いったい何なのだろうか。

石の音が聞こえる女を、採掘所に移動させた。すると鉄や山銅の採掘量が増えた。

不思議な力の解明のためにも、山銅鉄をもっともっと作らねば……。

山銅鉄を作っている最中に、爆発が起きた。幸いけが人はいなかったが、付近に山銅鉄が散乱してしまっただ。

山銅鉄の回収には時間がかかるだろう。

この前の爆発のせいだろうか。山銅鉄と関係のない人々にまで不思議な力が目覚めてしまった。

よくわからないものを蔓延させてしまうのはさすがにまずい。早急に解明しなくては。

ついにすべての村人に不思議な力が目覚めた。もはや解明するよりも先に、これの対策をしなくてはならない。

俺は俺の不思議な力を使って、むやみにこの力を使った者を罰することにした。

職人が山銅鉄の紋章を持ってきた。山銅鉄の大量生産が可能になっらしい。

山銅鉄を使って流石に古くなった家などを建て直させるように命じた。

職人が持ってきた紋章に、おもしろい性質を見つけた。指でこすると、不思議な力同様に緑色に光るのだ。

それだけではない。紋章の特定の部分をなぞると、紋章の模様の一部が緑色の光を発し、不思議な力のそれのように、水が出てきたのだ。

この不可思議な模様についても、調べさせることにした。――

「たしか、そのあとは模様について研究に熱中するあまり、その不思議な力――お嬢さんの言葉を借りて超普通の力、としようか――に関する研究はなおざりになっていき、いつのまにかその研究自体やらなくなったんだな」

「つまり、超普通の力についてはここでもまだわかってるのは一部だけ、ということですか」  
「ああ。研究もその日記以来全くと言っていいほど進んでいない。その日記、写したければやっていい」

その言葉を聞くや否や、日記の内容をノートに写す小町屋。こわい。

「じゃあ、こっちからもいいか？ 単刀直入に聞こう。あの蓋を、どうやって開けた？」

「我々はその日記でいう【模様】については知っていたからですな」

日記を指して、懐からカードを取り出し、守屋に見せながら言う。

「その【模様】自体を山の中に埋めたはずだが」

「千年以上もたっていれば【模様】以外が雨風で削られたり山崩れが起きていたりしていたんじゃないですか。我々が来たときはむき出しになっていましたな」

可能性として高いのは後者であろう。たかが千年ではそこまで地形が変わる、ということはないはずである。超普通の力さえ使わなければ。

「なるほど。それは理解した。ではそちらの順番だ」



「もうほとんど聞きたいこともないんですがな。ただ、気になったところといえば、その日記に出てくる【山銅鉄】とはなんですかな」

「ああ、それはここでとれる山銅と鉄を混ぜただけのものだ。意外と強くて、錆びないのが特徴だ。ほしければ大量に余ってるので、二斤ほど持っていけばいい」

さらりと福島や小町屋にとって凄いことを言う守屋。そして日記を回収して、本当に二斤の山銅鉄を持ってきた。

「これは土産に持って帰ればいい。俺からは尋ねたいことは大方聞いたし、そちらで無いようならお開きにしようと思うが」

「我々からは特に……無いですか？」

「なんで私にいちいち聞くのよ。……あんたらもないわよね？　じゃあこれでお開き、ということで」

「ああ。本当ならもっと話をしたかったのだがな。蓋を閉めに行かなきゃいけない。ついでに送っていかうか？」

四人はその言葉に甘えて、地上まで送ってもらうことにした。

◇◇◇

四月十五日、火曜日。一時丁度。長野県上伊那郡、箕輪町大字東箕輪。渋川郷（地上）。

「地上に出るのも、ずいぶんと久しぶりだな」

「残念ながら、地上の渋川郷の方は全く人はいませんがな」

「それが時代の流れというものなら、仕方がないだろう」

深夜の暗闇の中、神社裏の崖の前に送り出される四人。想定はしていたことなので、特に困ったりはしていない様子だった。

「さて、蓋を閉めなければ。また機会があれば、会うことになるだろう」

そういうと守屋は四人に背を向け、歩き出す。

そしていざ蓋をしようとしたその時、宇野が守屋に問いかけた。

「そういえばモリヤサン」

「何だ？」

「なんでその蓋閉めるんデスカ？」

「……蘇我や異国の神が入ってこないようにするためだ」

「蘇我氏は消えて、異国の神は共存できるから意味ないデスカ？」

「万が一、ということが考えられる。蘇我だって実は生きているかもしれないからな」

「別に開けっ放しにしてもいいと思いません」

宇野にはそのようにとじこもりたがる心が理解できないのであろう。彼は実の親によって地下室に軟禁されていたことがあるのだから。

「……頭ではわかってはいるさ。でも、俺は心のどこかで怖いと思っているんだろうな」

「そういう怖いのを乗り越えて人は成長します」

「でも、だ」

「でもじゃないデス。ワタシにはそうやって外とは違う理想郷を作ることが理解できません！  
結局逃げてるだけじゃないデスカー！ このヨナコンどもめ！」

強烈な眼光――残念ながら、夜なのでよく見えないが――で守屋をにらみつける宇野。

「宇野殿、流石に深夜テンションとはいえ言い過ぎですぞ」

「フフ、ハハハハハ」

突然高笑いをしだす守屋。

「そうか、そうだな。そうに違いない。この蓋は、二度と閉めないことにしよう」

将来この渋川郷が、魔術研究の最先端の研究施設街となるのだが、その裏にこのようなやり取りがあったことを、知る者は当事者たちだけであった。

## 超普通の始まり

---

四月十六日、水曜日。十二時三十八分。長野県伊那市、高遠町長藤。まちおこし高校。

水曜日は昼休みの後に、全校集会が行われる。

「えー、この集会は、新入生たちがはじめて参加する集会で……」

生徒部長の長話が続く中、異変が起きた。

爆発。幸いにも上方向へのものであったので、けが人はいなかった。爆心地、三年一組の列。

「あっ！ 山銅鉄がっ」

小町屋であった。

「小町屋！ またあなたですか？ 前に議長であるこの私がいるのに、いい度胸ですかね？」

「まあまあ、そんな固いこと言わないの。ほ・く・ろ・ちゃん」

「小町屋さん？ そんなこと言っていいのね？ 後で始末書ですよ？」

この時の爆発が、超普通の力を持った人——超普通の人——が大量発生するきっかけとなったのだった。

◇◇◇

十六時丁度。魔術部部室。

「それである爆発だったんですな。しかも山銅鉄まき散らしたんですな？ ……超普通の人が大量発生しても我は責任取りませんぞ」

「そ、そんなー」

ドアが勢いよく開けられる。逆光でみえるシルエット。議長の駒ヶ根だ。

「小町屋さん？ 始末書のお時間ですよ～。下級生のせん n ……自我の研修を中断してまで来てあげましたの」

「ひいっ！ みのがしてよほくろちゃん！」

もともと最大に近かった駒ヶ根の怒りメーターが【ほくろちゃん】の一言で振り切れた。

「始末書を書きたくて書きたくてしょうがないようですものね。特別に原稿用紙十枚のところを百枚にしてあげますの」

「悪魔！ 鬼！ 人でなし！ サディストォ！」

「あんたはいい加減始末書かけですぞ。そもそもそういうことは部室以外でやるなど何回言ったらわかるんですかな？」

「……福島さん、小町屋はこぶの手伝ってくれませんか？」

「もちろんですぞ」

「この裏切り者ー！」

「全面的にあんたが悪いですな。……宇野殿、大田切殿！ 部長殿を生徒会室まで輸送しますので、留守番よろしくですぞ」

そして小町屋は生徒会室に連行されていった。